



▲Runczech本社が入るビル

◀チェコの首都・プラハにあるRunczech本社に勤務するスタッフ

# チェコのロードレース運営会社「Runczech」での研修記 日本での大会運営改善へのヒントを探る 前編

早稲田大学本庄高等学院 教諭 田邊 潤

日本ではマラソンをはじめとするロードレースが各地で多数開催されていますが、告知、ポスター印刷、ボランティア集め、用具の購入、道路使用で警察との連携、当日の運営、撤収等、開催のための業務が多岐にわたるため、主催者である地方自治体の負担が非常に大きなイベントになっています。また陸上競技大会は、日本陸上競技連盟が統括する都道府県の陸上競技協会が中心になりますが、実質的な運営は学校部活動の陸上部顧問教員が準備と審判をしながら開催されています。

「行事の運営は手弁当で手伝う」という文化が古くからある日本では、自治体職員や学校教員のボランティア活動で多くのスポーツ行事が開催されてきましたが、近年、学校教員の超過勤務時間問題や部活動の外部指導者導入の重要性が叫ばれる中、競技会運営のあり方の見直しも必要な時代になっています。

そんな中、スポーツ健康イベントを、民間企業が中心となって自治体や学校教員の力を借りずに合理的に開催できないだろうかという私の研究テーマを、早稲田大学競走部時代の先輩である風間明氏（日本陸上競技連盟専務理事）に話したところ、風間氏の友人でチェコ共和国のプラハにあるロードレース運営の専門会社「Runczech（ランチェック）」を創業したカルロ・カバルボ氏を紹介していただくことになり、2022年6月から約4ヵ月間、現地での研修する機会を得ました。

## 複数のレースを一社で運営

Runczech（ランチェック）はカルロ・カバルボ社長を中心に、チェコ、ドイツ、デンマーク、スロバキア、マケドニア、セルビア、ロシア等、多国籍の人が集まるロードレース運営専門の会社です。25名の社員と複数の契約社員が英語で業務を行いながら、チェコとイタリアで年間12～15のレースを開催し、中でもプラハとナポリのレースは多くの参加者を集める世界トップクラ

スのレースです。タイムの計測、コースの整備、機材の手配、スポンサー集め等、大会運営のカギとなる各部署に専門家を配置し、各レースを開催しています。

各部署の業務をサポートする登録ボランティアを養成することもRunczechの重要な仕事で、ボランティアは数千人にのぼります。年間を通じて複数のレースを運営するため、スタッフ、ボランティアとも業務に慣れてゆくことで工夫を重ね、レース前後のレベルの高い演出を実現しています。

創業した1995年から2019年まで順調に業績を伸ばしてきましたが、世界を襲っているコロナ禍で、大会の中止や規模の縮小の時期を経て、2022年度は参加者集めに努力しながら大会の実施につなげています。

## レース運営のプロ集団

実際のレースについてご紹介しましょう。滞在した期間の中で私は、3つのハーフマラソンと5kmを4人で走るロードリレー、アフリカからの招待選手も走る10kmの高速ロードレースの5つのレース運営を体験することができました。

どの街も立派な陸上競技場があるにもかかわらず、すべて市街の中心広場をスタートとゴールに設定し、街の中心を走ることができるランナーの喜びを第一に、コースが考えられています。中心の広場にはさまざまな企業スポンサーのブースが並び、子供向け、ファミリー向けの遊戯もあり、とても楽しい雰囲気です。

EXSPOと呼ばれるゼッケン受け渡し会場は、少し離れた場所に設置し、同時にスポーツフェアを開催することで、地元のお店も出店。近隣から多くの人々が集まり市内は大いに盛り上がりました。

リレーレースはプラハにある公園内に5kmのコースを設定し、900チームが参加しま

▼5月8日に開催されたブラハマラソンはRunczechが運営する代表的なレース。男子はノバート・キゲン（ケニア、写真）が2時間7分54秒で優勝し、日本の服部勇馬（トヨタ自動車）は2時間18分06秒で9位だった



▲9月3日のプラハ10kmレース（BIRELL 10k Race）の女子の部を30分16秒で制したイリネ・チェフタイ（ケニア）

▶10kmレースに出場したプラハ市長のズデニェク・フジブ氏（中央）。左はRunczechのカルロ・カバルボ社長、右は筆者

した。同じ企業の社員や友人たちが4人集まりチームを作って走るレースで、競技としてのレース以上に、健康づくりイベントの一環のようでした。

5つのレースとも、メインのレースの前には、100m～200mのキッズランや5kmのファミリーランがあり、ベビーカーを押しながら走る人、三輪車で参加する子供たち、お年寄りの車いすを押しながら歩く人等、どんなかたちでもスタートしてゴールすればよいという、多様性を感じさせるとてもハッピーなレースが設定されていました。

メインレースのスタートは土曜の夕方。チェコの春から夏は9時過ぎまで明るいので日差しが弱くなる時間のスタートは、選手にとって心地よく、チェコ出身のスメタ



ナの名曲「モルダウ」が流れる中でランナーはスタートして行きました。コロナ禍で例年より参加者は少なかったようですが、ハーフマラソンの優勝記録は、男子が1時間3分30秒から1時間8分、女子が1時間13分15秒。日本のランナーが参加すれば上位で活躍できるレベルで、日本人がヨーロッパの街の雰囲気を楽しみながら走ることができる価値あるレースだと思いました。

このように、チェコにおけるロードレー

スは、走ることを中心にしながらも参加者、観戦者、一般市民みんなが楽しめるフェスティバル。その中心がロードレースという感じがしました。Runczechの運営するレースの演出と、合理的な運営をどのようにして日本に取り入れるかについては、後編でお伝えしたいと思います。

Runczech情報  
<https://www.runczech.com/>



## ヨーロッパのコロナ対応は？

コロナ対応に関して私の滞在していた時期では、街行く人々は全員ノーマスク、私もチェコ入国以来、快適にノーマスクの生活をしていました。滞在期間にはイギリス、フランス、ドイツ、そして東ヨーロッパ諸国、合計10カ国ほど訪問しましたが、現地の人でマスクをしている人にはほとんど出会いませんでした。

ヨーロッパの人々は、規則がなければマスクはしないという姿勢のようで、マスクをする人は基礎疾患のある老人やアジア系の人々で、マスクをするかしないかの選択は自己の判断という印象を持ちました。

ヨーロッパの街がこのような状況だったので、7月のオレゴン世界陸上で日本チームから陽性者が多数出たという報道を聞き、現状でどこでもマスク装着の日本からいきなり欧米の試合に出場することになれば、当然感染する可能性は高いように思え、マスクを常時着けていることで雑菌に対する抵抗力が低下してしまう可能性もあるのではないかと感じました。



▲6月18日にチェコ東部のオロモウツ市で行われたハーフマラソン（MATTONI OLOMOUC HALF MARATHON）のスタート風景

▼オロモウツ・ハーフマラソンの前座となったファミリーランではベビーカーを押しながら走る人も多数いた



▶6月23日のブラハリレーはストロモフ公園内で5km×4が行われた

▼ブラハリレーの前座だったキッズランでは、100m～200mの距離を子供たちが元気いっぱい走っていた

